



新茶初取引

緊迫の価格交渉
手合わせの音で締める



4月23日、J A大井川川根茶業センターで、新茶の初取引が行われました。新型コロナウイルスの影響で規模を縮小する中、生産者や茶商ら関係者が集まり、今期の茶業発展を祈願して威勢良く取引に臨みました。

初取引に先立ち、関係者は「新型コロナウイルスの影響で先行きは不透明だが、関係者の皆さん一丸となって今期に臨んで欲しい」と呼び掛けました。

続いて行われた取引では、買い手が新茶の色や風味を慎重に確かめると、生産者と仲介人がそろばんを囲み、交渉が始まりました。

緊張感漂う価格交渉の後、商談の成立とともに手合わせの音が会場に響き渡ると、生産者をはじめ、関係者一同安堵の表情を浮かべました。

新茶の季節到来

新緑に染まる茶畑、爽やかな香りが町を包む



新茶が芽吹き、最盛期を迎えた八中の茶畑

全国茶品評会 出品茶摘採

摘み取る手に込める産地の思い

第74回全国茶品評会

【開催地】鹿児島県南九州市
【審査会】令和2年8月25日～28日
【町内からの出品者（敬称略）】

▼【普通煎茶4^{kg}の部】

- 相藤農園（相藤直紀）
- 相藤園（相藤令治）
- 川崎好和

▼【普通煎茶10^{kg}の部】

- 丹野園（丹野浩之）

▼【釜煎り茶の部】

- 小平園（小平史郎）
- 橋本立生



摘採しながら出来栄を確認する相藤令治さん

5月2日から、全国茶品評会に出品される茶葉の摘採が町内各地で行われました。それぞれの茶園で丹精込めて育てられた出品茶はお茶摘みさんや関係者らに「二芯二葉」でていねいに摘み取られました。

「今年は暖冬や少ない雨量の影響を受けないように管理を徹底した。茶の品質は申し分ない」と相藤園の相藤令治さんは出来栄に納得の様子で話しました。

摘み取られた茶葉はすぐに一カ所に回収され、鮮度を保つため保冷車によって茶工場へと移されていきました。

茶時の到来

伝統を引き継ぐ川根茶
今年も銘茶の名にふさわしいものに

新型コロナウイルスの影響で、新茶シーズンを告げるイベントが相次いで中止となる中、町は今年も変わらず茶時を迎えました。

4月下旬から5月にかけて茶園には新芽が芽吹き、各農園からは摘み手の賑わう声や、茶工場のせわしない音が聞こえてきました。

茶業を取り巻く環境がどんなに変わろうとも、毎年変わることのない「茶時」が到来しました。先人が守り続けてきた川根茶を後世に伝えるのこそ、たとえ努力を続け、挑戦を重ねている方たちがいま。

良質な川根茶は、そんな方々の日々の積み重ねの中から守り継がれてきました。

ある園主は「今年のお茶は香りがとても良くて、良いお茶に育ってくれた」と出来栄に期待を込め、力強く話してくれました。そして、自身が育て上げたお茶に送るまなざしは愛情に満ちあふれていました。



▲茶時最盛期、各地で見られるお茶刈りの様子
◆休憩中のお茶摘みさんたち。「美味しいね」とお弁当に舌つづみ